We Wish "Yuna" Merry Christmas

For ADULT ONLY

Okujo-no-Yurirei-San
Unofficial Fanbook

We Wish "Yuna" Merry Christmas

御影月　悠依
(LoastedSeaweed)

Yuna Tomi 2012/12/21 (Fri) 13:22

十二月。終業式の日。教室——。
今日が終われば冬休み。
休みだからと言って羽目を外さぬように、という先生のお決まりのお小言もやり過ごし、今は和気藹々とざわつく、休み直前の特別な放課後の時間。
みんなすぐには帰らず、休みの間になにをするとか、もう早速遊びに行こうだとか、そんな話題でもちきりだ。
なにせ冬休みに入ったなら、すぐにクリスマスがやってくる。

——だから私が、親友である阿野にこんなことを聞くのもなにもヘンじゃない。
ううん、全然。むしろ自然なこと。大丈夫。

私は自分にそう言い聞かせて、阿野のもとへ赴く。

阿野の机では、前の席から逆向きに座った音七（ねな）が、突っ伏した格好でいるけれど、単に寝ているだけだろう。
そして机を占拠されたまま、胸元に抱えた雑誌の文字を追う阿野。きっと音七が起きるのを気長に待っているのだろう。
私は今日、一つの決意があった。息を呑んで、私は阿野に話しかける。

「ねぇ、阿野？　今ちょっといい？」
「あ、結奈……」
ほんの少しの、不自然な、間がある——。
けれど私は、構わず問いかける。
「あの、ね……？　来週なら暇、って言ってたわよね？」
阿野の視線が泳いでるのは、私の気のせいじゃない。
「う、うう……。暇、といえば暇、だけど——」
「良かった。クリスマスでしょ？　来週。だから比奈とパーティするんだけど、阿野も——」
「わわわわっ。あた、あたしは、いいよぉー……」
いつからか——。
阿野はここのところずっとこんな感じで、私を避けてる。
私は思わずため息を隠せない。
「……空いてるんでしょ？　ならいいじゃない。ウチに来なさいよ。しましょうよ、クリスマスパーティ——」
私はらしくもなく、強引に阿野を誘い続ける。
「い、いやあ……。流石に来週は急じゃない？　さ、再来週にしようよ？」
「ダメよ。それじゃ、来年になっちゃうじゃない。クリスマスは来週なのよ？」
私はなおも食い下がる。
だって、ここのとこずっと『来週なら大丈夫』と何度もはぐらかされているんだもの。
「あー、でも、ほら、だからこそ、みたいな？　……ね？」
阿野の要領を得ない受け答えの理由も、私は本当は理解している。でも——。
「24日の夜よ。いいでしょ？」

「いやいや、だって、せっかくの比奈ちゃんと二人きりでクリスマス過ごせるんだから、さ。あたしはお邪魔虫になんてなりたくないもん――……」

――そう。

実際、私と比奈は付き合っていて――恋人同士の関係ではあるけれど……。

だけど、四六時中イチャイチャしているわけじゃない。それどころかむしろ最近は、逆で……。

でも、阿野からこう言われてしまっては仕方がない。

「じゃ、比奈にはまた今度って言っておく。だから本当に、今度こそ。再来週は付き合ってよね。年、明けちゃうけど、初詣とか、なんでもいいから」

「……うん。考えとく」

阿野は少しはにかむ――。それはきっと、本気で困っている時の笑い方だ。

「……それじゃ私、晩ご飯のお買い物あるから先帰るわね」

だから私は無難な理由をつけて、大人しくその場を後にするしかなかった。

＊

いつものスーパー――『ちゅー丸』の生鮮売場。

にもかかわらず、私の頭は夕食の献立よりも、さっき阿野と話したクリスマのことで一杯だった。

――阿野から断られたって伝えたら、比奈、どんな顔をするだろう……？

パーティのきっかけは、クリスマスの夜にお互いの両親が珍しく、たまにはと外食に出かけるという話からだった。

もちろんはじめは一緒に誘われた私と比奈だったけれど「どうせなら夫婦水入らずにしてあげよう」と相談して辞退したのだ。それで、流れ的に比奈と二人でお留守番もといクリスマスパーティということになって……。

――でも実は、今の比奈と私には、阿野の知らない問題が一つある。

十一月にはじめて――正確には二度目のはじめてだけれど――私と比奈が身体を重ねてから、私たちはそれっきりだった。

もちろん、それ以外は普段通り続いていて、けれどそれ以上の関係はなくて……。

あの日、私たちの『はじめて』はお互いドキドキで、無我夢中の内に終わった。

でもどうやら私は『2回目』で大失敗してしまったらしいのだ。

『らしい』と言うのは、具体的になにが良くなかったのかまでは――その、ハッキリとはわからないからで……。

比奈はなにも言ってくれないし、わからないから……。

ただあれ以来――したがらないというだけで……。

　比奈の『おいしい』の一言が、今の私にはとてつもない苦痛に変わりつつあることを――。

　つまるところ私は、比奈と二人きりで過ごすクリスマスを避けたくて――、逃げ出したくて……。
　それで、無理に阿野をパーティに誘っているのだった。
　だって恋人同士で過ごすクリスマスには、やっぱり――しない訳には、いかないじゃない。

　比奈と――出来てなくて気不味いから、阿野にその場の雰囲気を誤魔化して欲しいなどと願うのは、ひどい我侭だともわかってはいる。
　だからってこんなこと、今更、阿野に相談出来るわけもない。

　そもそも私が比奈に好きだと言われた時――、背中を押してくれたのは、阿野だった。
　その時私は柄にもなく動揺して、迷いに迷って……。
　いつまでも答えを出せない私の話を、ただ真剣に聞いてくれたのは、阿野だった――。
　なのに今、私が比奈と付き合うようになって、阿野はどんどん私たちから距離を置こうとしていて……。
　だけど実は全然うまくいってませんでしただなんて。

　どちらにも転がれない頑なな自分が、情けなくてたまらない。

　そして、比奈は知らない――。
　最近の私が、自己嫌悪が高まる度に、比奈の好きなものばかり晩ご飯に作ってあげてしまっていること――。

Fuji Ano 2012/12/21 (Fri) 13:51

あれから間もなく、結奈は先に帰ってしまった。
――いくらしつこく誘われたって、ムリなものはムリだ。
あたしは、再び雑誌に目を落とす。
でも、結奈の淋しそうな後ろ姿が脳裏にチラつく。
息苦しい……。
書いてある内容なんて、ロクに頭に入ってきやしない。あたしは頭を振って雑誌を閉じる。
そろそろ、ねな（音七）を起こして、帰ろうかな……。
――と、その時。むくり、とねなが机から起き上がった。
「ふぁ、あ……」
「ねな、起きたの」
「ううん。……ね、いいの？　せっかくのクリスマスのお誘い、断っちゃって」
ねなは相変わらず眠たそうな目で言った。
「起きてたなら、助けてくれたら良かったのに……」
「いや、夢うつつでさ。なんか、お困まり？」
「だって結奈と居る時のひな（比奈）ちゃんてば、暇さえあればじーっと結奈の顔見てるんだよ？　なんて言うの？　恋する乙女の眼差し、って感じでさ……」
「ほぉ、それでそれで？　阿野は二人にイチャつかれてやってらんないよーってわけ？」
伸びをしながらおどける音七に、あたしは肩を落とす。
「いや、それが……。むしろ逆っていうか」
「――逆、って？　仲良くしてんじゃないの？　付き合ってんでしょ？　あの二人」
「うーん。結奈も結奈で、ひなちゃんから必死に目を逸らしては、隙を見て恐る恐る様子を探って――、って感じで。ドキドキ――モジモジ？」
「うーわー。小学生の初恋じゃないんだから……。って、あの子らにとっては初恋、なのかな？　いや、でも……。そりゃウチの羽美と沙紗の時より重症だね」
「はぁ……。ねながあの頃逃げ回ってた理由、よくわかったわ」
「そりゃ、どうも」
ねなは、なにか言いたげな顔で、にやりとする。
「あ、あ、あんなの目の前にしたら、あたしの方が恥ずかしくていらんないよ……」
「っと、ウワサをすれば――」
ねなが目線で示す先には、教室の入り口から中を窺うひなちゃんの姿があった。
きっと結奈を迎えに来たんだ――。
でも、結奈はついさっき教室を出て行ったところだし、ということは二人は行き違いになったのかも？
「ひなちゃん、こっちこっち」
あたしは声を掛けて、ひなちゃんを手招きした。
上級生のクラスだからか、必ず一礼してから入ってくる様子は毎度可愛らしい。

結奈が夢中になるのも頷ける。
――こんな子が幼馴染だなんて王道シチュなら、そりゃ朝ご飯にお弁当はもちろん、なんだってしてあげちゃうだろうな……。
帰ったら晩ご飯に、その後はお風呂で身体を洗いっこしたり……？
いやいや、それどころか湯船に浸かりながらお互いのほくろの数をくまなく数え合ったり……!?
そしてベッドに入ってからは――。

――はっ。
いやいや、あたしってば友達をネタになんてこと……。
最近のあたしは、ことあるごとにこうして結奈とひなちゃんのことで変な妄想を巡らせてしまっていた。対象が身近なだけに、そのイメージも妙に生々しくなってしまう。
だけど、こんなのただの興味本位。一過性の錯覚だ。ただ親友に恋人が出来て、意識しちゃってるだけ！
――う、ううう。
もうなに言ってんだろ、あたし。自分でわかってんじゃん。モロ意識しちゃってるんじゃん……。結奈のこと……。
――って、ああもう違うったら！
大体、あたしは三次元は専門外で……！

「――アノちゃん？　結奈ねぇは？」
「ゆ、結奈ぁ!?」
あたしが煩悶している間に、ひなちゃんに顔を覗きこまれていて、驚いて思わず素っ頓狂な声を出してしまった。
「ん。結奈ねぇ、迎えに来た」
ひなちゃんてば、やっぱり結奈と行き違いになったみたい。『どうして？』って顔でハテナマーク浮かべてる。
「あ、うん。今日は先に帰るって」
「……そうなの？」
ひなちゃんにその純真無垢な眼差しで見上げられて、あたしは胸の奥に痛みを感じてしまう。
でもそれは、さっきの妄想の罪悪感なんかじゃない。
「あの、えと。ひなちゃんは、聞いてないの、かな……？」
うまく受け答え出来ないあたしに、横から、ねなが助け舟を出してくれる。
「比奈ちゃんさぁ、結奈からメールとかなかったの？」
「メール……」
言われて、ごそごそ、とジャージを手探るひなちゃん。ケータイを開いて、すぐに『あ』って顔になる。
「……どう？」
「ん。今日の晩ご飯はハンバーグだって」
「……どゆこと？」
「おー。いいなぁー」
どこかズレた受け答えに、あたしはなんだかうまく対応出来なくて、代わりにねながしっかり反応する。
「要するに、晩ご飯の材料買いに行くってメールが届いてたってことかなぁ？」
「そう。てゆか、あたしも今日部活ないって言うの忘れてた」
「なるほどー」
どうも、結奈からのメールを見てなかっただけみたい。

ねなの一声に、あたしはただ『うんうん』と同意する。
「じゃ、帰ります。またです」
「ま、またね」
「おー。今度会うのは来年かなぁ？」
「ん」
小走りに教室を出て行くひなちゃんの後ろ姿を見送りながら、あたしは安堵のため息――。
――と、思いきや、ひなちゃんは扉のところで急に振り返った。
「アノちゃん。クリスマス、絶対来てね」
「あ、うん――？」
「絶対だよ？」
そう言って、ひなちゃんはまた子犬の目で――。
それでつい、言ってしまったのだった。
「あ、はい――」

ひなちゃんが身を翻した途端に、あたしはねなに泣きついた。
「ど、ど、どぉしよぉ!?　思わず『はい』って返事しちゃったよぉ!?」
「えええ？　あたし、知らないよぉ」
「そんなぁ……」
「はー。今のは完全に比奈ちゃんの作戦――、いや天然勝ち(？)って感じだもんね」
「もー！　ねな、わかってたんなら止めてよぉ！　この薄情者ー！」
「……阿野もさぁ。観念して、自分の気持ちに素直になったら？　『見てるこっちが恥ずかしい』よ？」
「あ……。う……？」
あたしは、ねなのツッコミに硬直してしまう。それからすぐに、羞恥心の波に飲み込まれる。
もしかして――！
「あ、ね、ねな……？　もしかして、ずっと気付いてて、言ってた、の……!?」」
「そら、阿野とだって短い付き合いじゃないからねぇ」
「べ、別にあたしは……。結奈のことなんて……！」
「はいはい。ツンデレ、ツンデレー」
「ツンデレ違うー！　違うったらぁ！」
ねなに茶化されて、思い詰めていた気持ちが、ふっと緩む。
同時に、でも――、と思う。
ねなは、なんとも思わなかったのかな……？
ささちゃん、うみちゃんが付き合いだしてから、本当に寂しく思わなかったのかな……？
あたしは――、ねなとは違う。
――本当は自分でもわかってる。
あたしは二人のおノロケを避けたいんじゃない。
親友を――結奈を、ひなちゃんに取られてしまったように感じて、嫉妬してるんだ。
なに言ってるんだろう、今更……。結奈にはもうひなちゃんがいるのに。
親友に横恋慕だなんて、最低だよ――。

Hina Komano
2012/12/21 (Fri) 16:35

「ただいま」
「あら、早かったのね」
すぐに奥から声が返ってくる——。だって、ここは結奈ねぇの家。今日も両親は仕事で留守だから、結奈ねぇにご飯をつくってもらう。
「今日、部活なかった」
あたしは居間のテーブルにカバンを置いて腰掛ける。
結奈ねぇは向こうの台所で、夕飯の準備の最中。
少しの間、包丁がまな板を打つ小気味よい音がして、結奈ねぇは言う。
「ああ……。でも、それならちょっと遅いわね」
「途中で茉莉先輩たちに捕まったから」
「ふふ、そういうことね」
台所から振り返って、結奈ねぇは「おかえり」と付け加えて小さく笑う。
あたしが先輩たちのお喋りに巻き込まれて中々帰れなかった様子を想像したんだとわかって、ちょっと恥ずかしい。
間もなく結奈ねぇはエプロンを翻して、料理に戻る。
ふわり、と漂う晩ご飯のいい匂いが、あたしのお腹をぐっと空かせてくる。
いつもこうして結奈ねぇは料理をしながら、時々手を止めてはあたしと一緒にいなかった時間の——学校での話をする。
「そう言えば……。阿野のことなんだけどね……？」
結奈ねぇはちょっと歯切れ悪そうに言った。
「アノちゃん？　それってクリスマスのこと？」
「そう。今日もまた誘ったんだけどね。ダメ、だって」

——おかしい。だって、さっきは……。
「でもアノちゃん。あたしには行くって言ってた」
「——え？　本当？　いつの話？」
「さっき。結奈ねぇ、迎えに行った時」
「ああ、メール見てなかったのね、比奈。ごめん。行き違いになってたのね。言ってくれれば良かったのに。いや、でも阿野ったら……。気でも変わったのかしらね？」
結奈ねぇは心底不思議そうな顔。
濡れた手をタオルで拭きながらこっちへ来てエプロンを外す。その後ろ姿はまるでお母さんみたいだから——、あたしはまた恥ずかしい気持ちになる。

この恥ずかしい気持ちは、一体なんなんだろう。
いつまでも結奈ねぇに甘えている自分が——？
それとも、もっと他の——？
前はこんなこと、なかったのに——。
一度考え出してしまうと、あたしは結奈ねぇと自然に喋れなくなってしまう。
なにもしてないのに、全力でトラックを走り切った直後のような胸の高鳴りを感じて——熱を感じて——それからすうっと血の気が引くような不安が来る……。

「……比奈？　比奈？　どうしたの？　もう眠いの？」
「あ」
また考えこんでしまっていた。
あたしは何度か呼ばれて、ようやく気付く。
「ほら、出来たわよ、ハンバーグ。ちょっと早いけど、眠たいならもう晩ご飯にしましょうか？」
そう言って、今度は手早くお皿を並べて食卓に料理を並べていく結奈ねぇの姿に、またもやドキドキしてしまう。
あたしのために晩ご飯を作ってくれて――。
「お風呂も沸かしといたからね。あと昨日のジャージ、畳んで置いたから忘れずに持って帰るのよ」
他にも色んなこと、全部――。
まるで本当のお母さんみたいだけど――そうじゃない。
結奈ねぇは、あたしの好きな人で、恋人のはずで……。
けれどひと月前、はじめての――から、あたしは結奈ねぇのことを想う度襲ってくる居心地の悪さに怯えていた。
結奈ねぇはあの日からも変わらずあたしを大事にしてくれている。
ううん。前よりもずっと――。

「さ、準備完了。食べましょう？」

でも、そうやって幸せであれば幸せなほど、あたしの不安は大きくなっていく。
「……ん」
締め付けられる胸の奥から、あたしがようやく絞り出す「いただきます」に返ってくる結奈ねぇの笑顔――。

失いたくない、と思う。
結奈ねぇに、嫌われたく、ない――。
――独り占めにしたい。
本当は、クリスマスだって二人きりで過ごしたい。
アノちゃんと話してる時の結奈ねぇは、私には見せない顔をしてることに気付いてしまったから。
告白した後から、どんどん不安が増えてって、どうにもできなくなってる。
アノちゃんは、結奈ねぇの大事な友達――親友なのに……。
あたしのこんな気持ちを知られたら、きっと軽蔑される。

＊

「お風呂、沸いてるからね」
ご飯を食べ終わってすぐ、結奈ねぇに言われるがままにお風呂。
湯船に口元まで身を沈めているのに、思わずため息が出てしまいブクブク水面が泡立つ。
思いは強くなるばかりなのに、大事にする方法はずっとわからないままだ。
あたしはちょうど一ヵ月前のあの日――『はじめてのやり直し』の時から、結奈ねぇに触れることが出来ないままでいる。
そういう雰囲気になる度に、ささっと逃げてしまっている。
今だって、結奈ねぇが「一緒に入ろうかな？」って言ってたの

をわざと聞こえないフリして、こうしてひとりで入ってる。

だって好き過ぎて、どうしたらいいのかわからない。

やり直しの翌日、あたしは一日中結奈ねぇとのことで頭が一杯で、夜、ついに我慢しきれず結奈ねぇの部屋に押し掛けてしまった。

——結奈ねぇが欲しい。
でも、傷付けてしまうかも知れない……。

突然、枕元にあらわれたあたしの思い詰めた顔を見て「いいよ」と照れ笑いしてくれた結奈ねぇ。
瞬間、自分が結奈ねぇのその優しさを利用していることに気付いてはっとした。
結奈ねぇはなんでも聞いてくれる——。
だからって、あたしの我侭を押し付けちゃダメだ、って思った。
覚悟して告白したはずなのに、中途半端に前にも後ろにも進めなくなってしまった……。
この不安はどうしたら消えるんだろう。
わからない。わからない——。
きっと、もう限界だった。
頭の中がぐるぐるして、感じたことのなかった気持ちがあたしをどんどんダメにしていく。

茉莉先輩も、美夕先輩も「時に我慢は必要」って言ってた。
だけどそれを聞いた結奈ねぇは、あたしの好きにしていいって言ってた。
ふとあの二人のことが頭に浮かぶ。

——サチさんと、恵さん……。
あたしたちの身体を借りて、結ばれたあの人たちだったら、なにか答えをくれるかも知れない。

だけどそんなの、サンタさんがいたって、きっと叶えてもらえない無理な願い——。

あたしは、お風呂場の天井を見上げる。
あの不思議な二人組に想いを馳せて、十を数える——。

Yuna Tomi
2012/12/24 (Mon) 18:02

街は赤と緑と、そして白と——。クリスマスカラーに染まりきっていた。
かくいう私も『ちゅー丸』に今晩のクリスマスパーティの準備で来たのだけれど……。
隣のシネコンから続々と出入りするカップルの山を見てしまって、ちょっと落ち込む。
ひとりで歩くには寂しいくらいの盛り上がりだ。
比奈と一応の恋人になってから、思えばああいうデート的なものをしていない。
というか、それ以前は一緒に出かけたりだなんて別に普通のことだったのだし……。
恋人という関係を、私自身よく理解出来ていないことが、今の微妙な距離感の原因なのかも、とも思う。
どこからともなく流れてくるクリスマスソングが耳から離れなくて、本格的に、滅入る。

「『We wish you a Merry Christmas』かぁ……。比奈は私なんかと二人きりで、楽しいクリスマスになるのかしら？　いっそ同い年のお友達と遊んで来なさいって、今からでも。……いやいや、そういう母親みたいなこと言うのが良くないのかも。もう辞めた方がいいわよね……」
と、思わず口に出てしまった独り言で、道行く人の視線を集めてしまった……。
——この独り言も、辞めた方がいいわよね。
なんだかここ最近、比奈との会話が気不味い分、独り言も増えてしまった。
本当はもっと、比奈とお喋りしたいのに……。

＊

私は玄関で、違和感に気付く。
鍵が開いている——。
両親は留守のはず。きっと今頃、仕事を早めに切り上げて比奈の両親とホテルでクリスマスディナーだろう。
だとしたら、合鍵を持った比奈だろう。
でも——。
なぜだか美味しそうな——焼き菓子（？）の匂いが漂っているのだ。
私はまさか泥棒が勝手に人の家でお菓子作りなんてするわけないとわかってはいながらも、忍び足で台所を覗いてみる。
そこに見えたのは、なんと——、鼻歌を歌いながら生クリームを泡立てる比奈の姿だった。

「ただいま。比奈、ひとりでケーキ作りだなんて偉いじゃない。ありがとう」
「あっ、結奈だぁー！　おっかえりー！」

そうして、見るなり私に飛びついてくる、比奈――。
「って、比奈!?　生クリームくっついちゃうって!」
「ああ、あはは。ゴメン、ゴメン」
生クリームまみれのホイッパーを手に抱きついてきた比奈を押し戻し、私はようやく異変に気付く。
「――『結奈』って?」
「え?　あっ……、ヤバ……」
リビングの方へ逃げこもうとする『比奈らしき何者か』を私はとっさに捕まえる。
それに、そっちに逃げたって行き止まり。逃げるなら廊下のはずだ。
「ねえ、比奈?　一応、聞くけど……」
「なぁにぃ?　結奈ねぇ……?」
わざとらしいくらいの猫なで声に、胸の前で両手を重ねる『オ・ネ・ガ・イ』のポーズ。
これは、もしかしなくとも――。
「比奈……、邪悪で性格の悪い悪魔のような悪霊に取り憑かれてしまったのね。近所の神社に連れて行かなきゃ。すぐ除霊してもらいましょ」
「あっ、悪霊って!?　悪魔って!?　ていうか性格も!?　失礼でしょっ!?　言い過ぎでしょっ!?　恵はそんなんじゃないもん!」
「――恵、やっぱり比奈に取り憑いて!　成仏したんじゃなかったの!?」
「サチさん!　今ですぅ!」
逃げ出そうと身体をよじる比奈――もとい恵が一声。
まさかサチさんも?　と姿を探すも見当たらない。恵の苦し紛れのでまかせだ。
そう思って、私は恵を逃がさないよう取り押さえていた――つもりだったのだけれど……。
私の身体は勝手に動いて、恵を解放してしまう。
あまつさえ、比奈のことをぎゅっと抱きしめて――。
「――フフ。そうよね、恵は天使だものね。私だけの、ね」
と、歯の浮くようなセリフ……。
「ああん、サチさんたら。今日はやけに情熱的……。悪魔的な魅力ですぅ」
そうして、ひしっ、と抱き合う私と比奈――に憑依したサチさんと恵……。
どうやら私たちは、再び『百合霊』の二人に取り憑かれてしまったらしかった……。

Yuna Tomi
2012/12/24 (Mon) 19:48

「メリー・クリスマース！」
「めりー、くりすまーす！」
景気良くパーンと音を立てて弾けるパーティークラッカー。
……一時はどうなることかと思ったけれど、あれからすぐに私たちの身体は解放された。
百合霊の二人は、今は大人しく食卓に着席している。比奈も並んで座って、久々の再会を喜んでいるように見える。
そんな中、
「さぁ、サチさん！　これがクリスマスですよ！」
――と、得意気な恵に、サチさんはご満悦。
「まぁまぁ、流石ね、恵。とっても美味しそうよ」
それに私は思わず抗議の目。
「あの、作ったのは、ほとんど私なんですけど……？」
「フフ。わかっているわ。ありがとう、結奈さん。それに比奈ちゃんも、恵に手伝わせてくれてありがとうね。お陰で恵の作ったくりすます・でぃなーをいただけるわ」
そうして、にこり、とまた微笑むサチさん。
とてもじゃないけど、この笑顔に文句は言いづらい……。
私は、再び恵に向き直る。
「ていうか、恵？　クリスマスが未練で成仏出来なかったって、本当なんでしょうね……？　それじゃ一体、なんのための『ユリトピア』だったのよ」
「まぁ、それはそれ。これはこれ、ってことよ」
「説明になってないでしょう⁉」
全く悪びれる様子もない恵に、全力でツッコんでしまう私。
――本当にこの子は……。
生前から元々、悪霊だったんじゃないかしら。
「大体、恵はともかく、サチさんの時代にはクリスマスなんて風習なかったんじゃ……？」
「もぉ、わかってないなぁ、結奈は。だからこその『未練』なんだって！　恋人とディナーを食べる楽しいクリスマス、これをやらなきゃ『あっち』で年も越せませんってことよ！　そうですよね⁉　サチさん！」
「そうそう。そうなのよ、結奈さん。『あっち』にはどうにも娯楽が少なくて……。それでつい『さんたさん』にお願いしてしまったのよ。でも、まさか叶うだなんてね」
「サンタさんにお願いした、って……。サチさん……。後付けのお願いでこっちに戻って来れたのなら、それって『未練』じゃなくてただの――」
サチさんに疑念を抱く私に、恵が割って入る。
「あああああー！　早くパーティをはじめないと！　ほらドンドン私たちの身体が段々透けて……⁉　結奈、お願い！　時間がないのよぉ……！」
「だから、そっちは元から透けてるじゃないの……！　もう、そのまま成仏したら？」
「やーん。結奈ったら、冗談キツイー。でもでもぉ、比奈ちゃんも、大勢の方が楽しくっていいよねー？」
「ん」

――はぁ……。
幽霊のくせに、どうしてこうまでクリスマスに浮かれているのだろう。
ただ確かに、恵にも一理ある。
こうして二人がここにいてくれるのなら、比奈と気不味い空気になることもまずないだろう。頼みの綱だった阿野も、やはり来ないみたいだし……。
だけど一応、私は念を押しておく。
「じゃ、これ食べたら――いや、食べる間は身体をお貸ししますけど、クリスマスを満喫したら、大人しく成仏してくださいね？　二人とも、いいですね？」
「わかったわ」とサチさんに、
「最高のクリスマスにしましょうね！」と、恵はなんだかよくわからない気合の入り方をしている。
まぁ、強引過ぎではあるけれど、これはこれで悪くない。
私は冷蔵庫からシャンメリーを取り出す。
「それじゃ、まずはコレね」
「わー、お酒？　まさか、結奈の方から羽目を外しちゃうなんて！」
「……馬鹿ね。ノンアルコールよ。ああ、もしかして知らないの？　これはシャンメリーって言って、中身は炭酸のジュースなの」
私の説明に、今度はサチさんが目を輝かせる。
「炭酸……？　結奈さん、それって前に飲んだ『こぉら』みたいにしゅわしゅわするってことなのかしら？」
「ええ、それなりに……」
「まぁまぁ。よく見れば瓶も立派で……。とっても美味しそうね。是非飲んでみたいわ」
そう言って、サチさんは掌をぽんと叩いて期待の表情を浮かべる。
「ああ、これってお祝い用の飲み物なんです。だから開ける時、栓がポンって飛ぶようになってて――」
「なにそれ!?　わたしやりたーい！　あ、そうだ！　比奈ちゃんもやりたいでしょっ!?」
「ん。……ちょっとだけ」
「あっ、こら恵！」
案の定止める間もなく、恵はまた比奈に取り憑いて、シャンメリーの栓に手を掛ける。
「ねぇ、こう？　こんな感じ？」
「あああ、電気に向けないでよ！　それ結構勢い良く飛ぶんだから――」
「大丈夫、大丈夫ー！」と恵は言うけれど……。
次の瞬間――。
パーンッ！　――と、割れる蛍光灯の音。
そして、暗闇――。
「わお！　やっちゃった」
「め、恵ー！」
「まぁまぁ」
「結奈ねぇ、ごめん」
こうして二人きりのはずのクリスマスから一転――百合霊た

ちとの、騒がしい聖夜は更けてゆく……。

＊

「サチさぁん、私酔っちゃったかもぉ……？」
「フフ。こちらへいらっしゃい、恵。膝枕してあげましょう」
まだ一時間も経たない内に、悪霊たちはすっかりデキあがっていた。
「ほら、結奈さん。結奈さんたら！」
多分、膝枕したいから私の身体を貸せという意味なのだろう。私を手招きするサチさんも、赤ら顔で様子がおかしい。
――もしかしてシャンメリーって、聖なる力（？）的なもので幽霊に効くのかしら……？
「――いえ、そんなことは一切ないのだけれど」
「って、他人の考えを読まないでくださいっ！」
「いえ……？　結奈さん、あなた今、声に出ていてよ？　無意識に独り言だなんて、最近お疲れなの？　大丈夫？　あ、でもまだお料理が残っていてよ？」
「もう無理です。お腹いっぱいです……。ていうかなんなんですか、サチさん。そのお嬢様風キャラは。悪酔いしすぎです」
ずっとこの調子で、幽霊だから食べれない二人に『味あわせる』ために身体を半分貸していたものだから、私のお腹はとっくに限界だった。
「お二人とも……。そろそろ、クリスマスは満喫したんじゃないですか？」
「なによ、結奈ぁ。まだ全然じゃない」
ところが、お開きを匂わせた途端、シラフに戻る恵。
「まだ、って。もう充分食べたじゃない」
「もぉ、アレがないじゃない？　クリスマスと言ったらアレでしょ？　ね、サチさん」
「ええ、そうね。私も気になっていたの。あの『白いおじさんのちきん』の用意はどこかしら？」
「チキン？　七面鳥なら食べたじゃないですか？　……出来合いのですみませんけど」
私の言い訳に、サチさんは深刻そうな顔で、
「違うわ、結奈さん。『白いおじさん』よ。ほら、クリスマスの日にはこのポーズで、店先に立っているのでしょう？　『さんたさん』の帽子を被った『白いおじさん』が……」と、両手をようこそのポーズで胸の前に開いて、サチさんは大真面目に抗議してくる。
――ああ、もしかして。
「コラ、恵。サチさんに適当なこと吹き込んじゃダメでしょう」
「はぁ？　わたし、前に生徒の子がそう話してるの聞いたんだからね。『クリスマスだから予約しなきゃ！』って。あっ！　ほら、これこれ！　さっきからテレビのCMでもやってるじゃん！」
テレビを指さして、今にも泣き出しそうな恵。
――やっぱり、なにか勘違いして思い込んでたんだわ。

「いや、これは……」
「もしかして、予約してないのっ⁉　『白いおじさん』のお店で！」
「だから、それはこのお店が勝手にキャンペーンで言ってるだけで、本来ここのチキンとクリスマスはなんの関係もないんだって。つまり、このチキンはあくまで庶民的なものでだって。七面鳥の代わりにどうぞって。だからこっちがホンモノで、つまり、このチキンはあくまで庶民的なもので……」
「そ、そんな……⁉」
大騒ぎで落胆する恵と一緒に、サチさんは無言で肩を落とす。そして『あなたには失望したわ』と言わんばかりの深い溜息……。
――ていうか、これって、そんなに重大なことなの……⁉
え？　もしかして私が悪いの⁉
床に膝をついてうなだれていた恵が、半ベソの顔を上げて言う。
「……じゃあ、最後にケーキ。それでいいよ。ほら、冷蔵庫で冷やしてるでしょ？」
そういえば、さっきまで半ば無理やり作らされたんだ。
思い出して、私の胃は慄く。
「でもね。これ以上は、ちょっと……。あ、明日にしましょ？」
「確かに、そろそろ良い頃合いでしょうし、次の催しに進みましょうか」
「次……？」
私は、サチさんの言わんとすることがサッパリわからない。
「結奈ったらぁ。もぉ、わかってるクセにぃ」
恵は一転して、機嫌を直し擦り寄ってくる。
「わからないわよ。乾杯もしたし、お料理も食べたし。もう充分でしょう？」
「そうね……」とサチさんは再び憂い顔。それは『どうしてわからないのかしら？』とでも言いたげなお顔で……。
そうしてサチさんの態度になにかを察した恵が、にこにこして私に謎掛けしてくる。
「ほら、お腹が一杯になったらすることがあるでしょう？　ヒントは――『クリスマス・イブ』、『恋人同士』、『二人きり』と来たら……？」
「――なっ、まさかまた……⁉」
「さぁ、それでは答えをどうぞ！　ひなちゃん！」
「って、どうして比奈に――⁉」
恵の無茶振りに、思わず比奈の方を向いてしまう私。
じっと三人――正確には私一人と幽霊二人だけれど――の注目を集め、俯いてしまう比奈。
顔を仄かに赤らめたその様子に、私はひたすら焦るしかない。
「こ、答えは――。『好きな人と、えっちなことする』……」
「せいかーい！」
「――じゃなーい！　比奈になんてこと言わせてんのよっ⁉」
ノリノリで盛り上がる恵に、次の展開が読めてしまう。
「だ、ダメだからね⁉　また身体を貸したりしないからね⁉」
「えー。けちぃ」
「もう、なにが『未練』よ。完全に悪巧みしてたんじゃない」

私の剣幕に、恵はふくれっ面でサチさんの方へ子どもみたいに駆け戻る。
「違うもーん。あたしたち、ちゃぁんと、サンタのお願いで来たんだもーん！」
「誰がそんな嘘を真に受けるもんですか……！」
今にも一触即発。私は二人に詰め寄る。
ところが、サチさんは居直った。
「誤解よ、結奈さん。確かに、私たちは『さんたさん』のお願いで来たのよ。ただし、願いを叶えてもらうのは私たちじゃなくて——比奈さん」
「……比奈が？」
私の声に、比奈が顔を上げた。もはや真っ赤に瞳を震わせている。
「——ごめん。結奈ねぇ」
そんな目をされたら、こっちまで切なくなってしまう。
恵は、えへん、とふんぞり返って、
「そういうこと。わたし達がクリスマスパーティを思いっ切り盛り上げて、ロマンティックな夜の雰囲気をつくってあげようって、来てあげたワケ。わかった？」
……もう、私にはまともに怒る気力も残ってない。
というか、少し頭がクラクラする……。はしゃぎ過ぎたのかしら……？
「いや——、『盛り上げて』って……、『ロマンティックな夜』って……。あなた達、普通に飲み食いしてただけじゃないの……」
「そぉかしら？　……そろそろ、効いてきたんじゃない？　シャンメリーとやらが……」
「……は？」
ふふふ、と悪魔のように笑う恵の表情が、ぐにゃり、と歪む。
瞬間、視界がふわりと暗転する。
意識が遠のいてゆく。
恵とサチさんが大慌てで、ぎゃぁぎゃぁと騒ぐのが聞こえる。
私、どうしちゃったんだろう……。
その内に、比奈が私を呼ぶ声だけがうっすらと、頭の中をこだまして、それも最後は途絶えて消えてしまう。

Hina Komano
2012/12/24 (Fri) 23:59

結奈ねぇが倒れてから、数時間。
あたしは結奈ねぇの部屋の隅っこで、膝を抱え座り込んでいた。電気を消して、ただひたすら、じっとして……。
部屋の時計は、もうすぐ日付を跨ぐ。
――まさか、自分のせいでこんなことになるなんて……。
12月24日の、23時59分――クリスマス・イブ。
今夜は楽しい、クリスマス――のはずだった。

「うう……。あ、れ……？」
結奈ねぇがベッドで起き上がろうとする――けれど、今にもふらふらと倒れそう。
あたしは慌てて立ち上がって身を支える。
「結奈ねぇ、大丈夫？」
「あ……。比奈……？」
薄暗がりの部屋で、結奈ねぇの瞳が潤む。目が逢って、つらいはずなのに、にこりと微笑みかけてくれる。
けれどあたしは『2回目』の夜のことを思い出して、びくりと身体が強張る。
「……きゃっ」
そうしてあたしは、支えていたバランスを崩して自分ごと、結奈ねぇを再び布団に倒れ込ませてしまった。
これじゃ、まるで――。

「なんだか『最初の時』みたいね……？」
結奈ねぇに思っていることを言われ、あたしの胸はバクバクする。部活で走り切った後なんかより、ずっと何倍もドキドキ、鼓動が高まる。
平気でなんて、いられない――！
あたしはベッドから飛び上がって、逃げようとする。けど――。
「待って」
結奈ねぇに、背中までがっしりと腕を回されて引き留められてしまう。あたしを身動きできないままに、結奈ねぇは言葉を続ける。
「比奈は――。サンタさんに――あの二人に、なにをお願いしたの？」
耳元で囁かれる。結奈ねぇの低めの声。抵抗できない。
「クリスマス……。楽しく過ごしたいって」
「そう……。じゃ、今日は楽しかった？」
恵さんたちのことを怒ってるワケじゃないのはわかる。結奈ねぇは、この先のことをあたしに聞いてるんだ。
クリスマスパーティの後、盛り上がった恋人同士が、その夜にすることについて――。
でも、ここでそれを言っても良いのか。迷う。
恵さんたちがなにをしたかはわからないけれど、結奈ねぇは具合を悪くして、倒れてしまって――でも、怒らずにあたしのしたいことを聞いてくれて。
そうしてまた、結奈ねぇの優しさにつけ込むことになってしまう――。

すぐに返事が出来なくて、黙りこくってしまうあたし。その身体は解放されて、自然と結奈ねぇの胸に落ちる。
そうして、結奈ねぇは、ふんわりとあたしの頭をなでてくれる。あたしの耳がちょうど結奈ねぇの胸の谷間にあたる。
結奈ねぇの鼓動が、時計の秒針よりも静かに時を刻むのを感じる。

結奈ねぇは、あたしの返事を待ってる——。
ここでこのまま、なにも言わずに誤魔化してしまう方が、結奈ねぇを裏切ることになる。
あたしは覚悟を決めて、結奈ねぇの頬に寄せて言った。
「結奈ねぇと、えっちしたい……」
「うん……」

それから、暫くの、間——。
あたしは不安になって、身体を離す。結奈ねぇの様子をうかがう。
「結奈ねぇ?」
「ちょ、ごめ……。改めて言われると、恥ずかしかったっていうか、嬉しいっていうか……。今度は失敗しないように、格好良く返事してあげようと思ったのに、ごめん……」
両手で顔を抑えて、震えてた。
あたしは結奈ねぇの両手を掴んで、強引に顔を覗き込む。
「結奈ねぇ、可愛い」

……これだ。これが、あたしの好きな、結奈ねぇだ——!

「ばっ、ばかぁっ! なんで隠してるのに、わざわざ顔見るのよぉっ!」
「ごめん。……でも、あたし、結奈ねぇのこと我慢出来ないってわかったから」
「そ、そう。やっぱり、我慢してたんだ——。良かった。嫌われたのかと思ってたわ。もう、前にも言ったでしょ? 比奈の好きにしていいって」
「でも、嫌われたら、イヤだし」
「それでも、いいじゃない。やってみなきゃ、わからないことだってあるわ? ——って、私も同じね。比奈からなにか言ってくれるのを、ただ待っていただけで。おあいこね」
「ん……。じゃあ、今から——していい?」
「う、うん……。どうぞ……?」
確かに、改まって言うのは恥ずかしい。
でも今は、目の前の好きな人を喜ばせたい。その気持ちでいっぱいだった。
両手を開いた結奈ねぇ。
あたしは、その右の掌にくちづけする。
「きゃっ……。どうして、手なの?」
「結奈ねぇの手、好き……。いつもおいしいごはん、つくってくれる」
飾り気のない、綺麗に切り揃えた爪。
ほっそりとした指。
あたしのより一回り大きくって、やわらかな掌……。
全部、全部、大事にしたい——。

「次は……」

あたしは、結奈ねぇの上着をお腹のところからめくり上げる。顔を出したおへそに、口を寄せる。頬があたって、暖かさがわかる。
「ひ、比奈ぁ……。どうしてそんな、変なトコばっかり……」
「前に触れなかったとこ、全部触る」
「だからってそんな……！　くすぐったいったらぁっ」
結奈ねぇが身を捩るのに合わせて、ボトムスに手を掛ける。
「結奈ねぇ、いいよね……？」
結奈ねぇの動きがぴたっと止まって、数秒。
見やると無言で頷くように影が動いて、あたしは了解を得たとショーツに触れる。
手を使わずに、唇だけで——。
「比奈……。なに……、してるの……？」
「先輩が、こうしたほうが喜ぶって」
「ま、またぁっ!?　な、なんでよぉっ……!?」
結奈ねぇの一番大事なところはすごくやわらかくて、あったかくて……。唇でその感触を味わうだけじゃ、あたしはすぐに物足りなくなってしまう。
「ちょっ、比奈ぁ!?　だ、ダメ、それ以上は——」
あたしは舌を突き出して、ショーツの布地の上から、その膨らみの形を歪ませてみる。
するとすぐに反応があって、湿っていく。
「はっ、はぁぁ……！　ダメ、ダメっ……。そんなとこ、汚いったらぁ……っ！」
そこを濡らすのは、あたしの唾液だけじゃなくて——。
「汚くない。結奈ねぇの、味、する……。甘い……」
「ばかあああっ……」
布地と肌の隙間から、舌を滑り込ませる。熱い蜜が溢れて、結奈ねぇの内腿が小刻みに痙攣する。
「んっ……！　んんっ……！」
思いの外、自分の声が大きいことに気付いてしまったのか、結奈ねぇは声を押し殺そうと必死になる。
こんな時にまで、真面目な結奈ねぇ。
でも、あたしはその声をもっと聞きたくて仕方がない。
「もっと……。もっと聞かせて——？　結奈ねぇの、秘密の声……」
「ダメよぉっ……。我慢出来ないっ！　近所迷惑になっちゃう……っ！」
「我慢しなくていい、って言ったのは、結奈ねぇのほうだよ？」
「だってぇ……」
いつもは私が甘えてるのに、子どもみたいになってしまった結奈ねぇの姿から、あたしは目を離せない。
「結奈ねぇ、そろそろ」
「うん……」
朦朧とした様子で、結奈ねぇはあたしに促されるままにショーツを脱ぐ。
次は、あたしの番——。
「結奈ねぇ、脱がせて……？」
すると、結奈ねぇはたどたどしい手つきで、あたしの服をゆっくりと脱がせてくれる。薄暗がりの中、布の擦れる僅かな音にさえ、結奈ねぇは敏感になっているみたいだった。
そうしてお互い、生まれたままの姿になってから、あたしは再び結奈ねぇに横になるよう促す。

「まだ、したいこと、あるから――」
「うん」
あたしは結奈ねぇのすべすべの太腿を撫でながら、少し、開く。
結奈ねぇの両足の狭間に、あたしのそこをあてがって――動かしてみる。
「ひ、比奈ぁっ!? なんて格好して――!? これも、先輩に教わったのっ!?」
「ん……」
でもまさか、こんなに気持いいだなんて。
腰から下が、溶けて消えてしまったかのような感覚になる。
「ぁ……。比奈……、比奈ぁっ……!」
先輩に教わった通り、少しずつ角度を変えて、動きを大きくして――。
その度に、結奈ねぇの反応が変わるのが嬉しくて――。
「ゆ、ゆなねぇっ……! ゆなねぇ……っ!」
「んっ、あっ、ひなぁ、つよすぎ……。ひなぁ……っ!」
途中、結奈ねぇは何度も声が出なくなった。
でも、またすぐにあたしの名を呼んで、ねだる――。
「ひなっ、ひなっ……!」
「ゆなねぇっ、まだ……。していいの……っ? ねぇっ、これ、すきなのっ? きもちいいっ?」
「うん……っ! いいからぁっ、とめないで……! すきっ、すきぃっ……! もっと……っ、していいからぁっ……!」
そうしてあたしは、息が切れるまで動き続けて、欲しいだけ、結奈ねぇを求める――。

結奈ねぇにしがみつかれて、あたしの腕は指の跡がたくさん残って、でも、その痛みすら心地良くて――。
結奈ねぇの心の中に、ずっとこうして残っていられたらどれだけいいだろう、って思った。
独り占め出来たなら、どれだけいいだろうって――。
――やっぱり、この時はまだ、そう思ってた。

Fuji Ano
2012/12/25 (Sat) 00:53

　結奈の家の前。あたしがピンポンを押す瞬間――。
「……っ！」
　ただならぬ様子の声が、扉の向こうから聞こえてくる。
　同時に、胸騒ぎ――。
　人ならざるものが『視える』あたしは、それが普通のものでないことがわかる。
　前に出会った『百合霊』の二人とは違う、邪悪な気配。

　――なにかが、起きてる……!?
　あたしのこの直感は、嘘じゃなかった。
　もしかして、とノブを捻ると、玄関のドアの鍵は開いていて、けれどリビングには人影はない。そして単にパーティの後とは思えない、まるで荒らされたように散らかった室内……。
　最初の邪悪な気配は消え、代わりに再び人の声が奥から聞こえる。あたしは勢い良く結奈の部屋に飛び込んで――。

　――で、そこでは結奈とひなちゃんが――している最中だったワケで……。
　もちろん、あたしはその場をすぐに逃走。けれど陸上部のひなちゃんに到底敵うはずもなく、あえなく捕獲。連れ戻されて、今は結奈の家のリビングに着席中。
　あたしは沈黙に耐えられず、明るく笑い飛ばそうと口走る。

「あー。あははは。結構盛り上がったみたいだねっ！　ま、あたしがいなくっても、楽しいクリスマスパーティだったみたいだしさ。一件落着って感じじゃない？」
　直後、今にも『シーン』って音がしそうな程の静寂。
　そして結奈がゆっくりと口を開く。
「……来るなら、来るって言ってよ」
　それを聞いた途端、あたしは頭にかぁーっと血がのぼって、たまらず立ち上がった。
「あ、あたしだって来たくて来たワケじゃないしっ!?　二人に誘われたから来たんだし！」
「そうじゃなくて、それならそれで、準備とか……」
「準備って!?　あたしがいるなら――、ああいうことしないって意味？　それってあたしが邪魔ってことでしょ!?」
「そんなこと言ってない！　私は阿野とも友達でいたいの！」
　結奈の口からハッキリと『友達』と言われて、愕然とする。
　いや、それは本来当然のことで、喜ぶべきことなのかも知れない。でも、今のあたしにとっては、死刑宣告も同じだった。
「うっ、ううっ。ああ……。そんな言い方、ずるい。ずるいよぉっ……！　結奈、欲張りだよぉ……っ」
「なにも、泣くことないじゃない……」
「だって、だってぇ……」

　――だって、あたしはあくまで『親友』のままを貫こうと覚悟してここへ来たのに、二人は『恋人』のクリスマスの真っ最中で……。そんなのって、ないでしょ？　叶わない恋なら、はじめから勘違いだったって思わせておいてくれたらいいのに。
　なんでこんな残酷なことするのよ。

もう、最悪だった。あたしは泣き腫らしたまま帰ろうとして、手を掴まれて立ち止まる。けれどその手は――。
「ひな、ちゃん……？」
「アノちゃん。いいの？　本当に」
「な、なにが……？　だって、二人は付き合ってるんだし」
「だから、アノちゃんはそれでいいの？」
「比奈、なに言って――！」
「結奈ねぇはニブいから。言わないとわかんないんだよ」
比奈ちゃんのその目は、本気だった。あたしを試しているのだとわかった。それなら――。
あたしは大きく深呼吸して、結奈を見据える。
「結奈、聞いて。あたし、結奈のこと好きかも知れないの」
「え、えええええ!?」
「結奈ねぇ、ちゃんと聞く」
すかさずひなちゃんに叱られて、平静を取り戻す結奈。
「今更こんなこと言うのおかしいってわかってる。でも聞いて欲しかったの。二人が付き合ってから、あたし変なの。寂しいって思っちゃうの。これってただの勘違いかも知れない。だけど、確かめられないの。自分じゃわかんないの。だから、とにかく言うしかないって、思って……。だから――！」
それ以上は、言えない。
現・恋人のひなちゃんを前に、言っていいのはここまで。
「――だから、今日は帰る、ね……。お騒がせして、ごめん」
部屋を出て、玄関へ。廊下の途中、音を立てて涙が溢れてるのがわかった。ぽと、ぽと、と――。
そして、その後ろについてくる足音も。
なんて言われるんだろう。それとも、今日で最後かも知れない。二度と口なんて聞いてもらえないかも知れない。
ここで終わったなら、ある意味幸せだったのかも知れない。けど――、あたしの好きになった遠見結奈って女の子は、どこまでも、大真面目で――。
「阿野。私、無神経なこと言ってたのね。ごめんなさい」
どこまでも、不器用で――。
「今日の、返事は――。私も急で、びっくりしちゃって、その、よくわかんない、から……。だから、お互い、ゆっくり確かめてゆけばいいと思う。比奈も、それでいいって、さっき聞いたから……」
そう言って、結奈は私の前で目を閉じる。
いつの間にか後ろにいたひなちゃんが言う。
「キス、してみて。少なくとも、恋かどうかはわかるから」
「え、えええええっ!?」
さっきの結奈よりも大声をあげてしまうあたし。
「ひなちゃんを前に!?　キスぅ!?　え、い、いいの!?」
「ん。隠れてされるより、いいから。なんならあたしも一緒にする。それでどう？」
「ど、どうって……。ごちそーさまって感じだけどぉっ……」
まさかの提案に、夢なんじゃないかとすら思った。
でも、恐る恐る唇で触れた結奈の頬は、リアルなやわらかさで、しっとりと程良く湿っていて、今思い出しただけでも、あああああ――！
……本当、この時、『恋かどうかわかる』なんて、ひなちゃんはどういうつもりで言ったんだろう。
こんなの絶対、恋に落ちちゃうしかないじゃん！
（了）

「あら。……さすがに二人分同時に願いを叶えるのは無理があったかしら？」
「まぁまぁ、サチさん。これはこれでオッケーなんじゃないですか？」
「そうかしら？　私たちがまだ『こんなところ』にいるということは、ユリトピアの完成には今一歩遠いということよ？　最後まで見届けてあげなくては、それこそ『未練』というものよ？」
「んー。それじゃ、もういっちょ応援しちゃいます？」
「そうね。ユリトピアのために……！」
「めざせ！　ユリトピア――！」

(つづく)

奥付

表紙イラスト
田口まこと（HolyMist）
http://holymist.iza-yoi.net/

本文・発行人
御影月悠依（LoastedSeaweed）
http://tukihusagari.hatenablog.com/
hichichika@gmail.com

発行日　2014.03.23

印刷所　有限会社ねこのしっぽ　様
〒211-0001
神奈川県川崎市中原区上丸子八幡町816
TEL 044-430-3767

※本書に登場する人物・団体組織等は全て架空のものであり実在の人物・団体組織等とは無関係です